

柔軟な発想と継続力が
新しい名所を生み出した

とおかわ

十川



元祖こいのぼりの川渡し

旧

十和村の中心地であった十川は、JR窪川駅から約40kmのところにある。国道381号と四万十川に沿って形成された十川の街。国の重要無形民俗文化財に指定されている幡多神楽で有名な、郷社星神社（しょうじや）の入口にあたる。国道を挟んだ、神社の向いがこいのぼり公園で、4月中旬からの約1カ月間、頭上を数百匹のこいのぼりが勇壮に泳ぐ。このこいのぼりの川渡しは、30年以上も地元の体育会などの尽力によって続けられている。シーズンになると、思わず足（車）を止めカメラを向けるドライバーを、国道のあちらこちらで見かける。

オリジナリティ
溢れるアイデア
と継続力が、新し
い名所を生み出し
たことは、地域起
こしの例としては
特筆すべき取り組
みであるといつて
良い。



地域に根ざした必要な存在

こいのぼり公園から西へと街は続く。国道の両脇に郵便局やJR十川駅、役場十和総合支所、JA、商店、民家が混在している。

十川の街は、古くから、伊予と土佐の物流の拠点であった。そのためか、地区の商店の多くは、県中央部や愛媛県の出

身であるという。

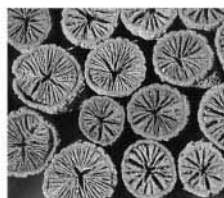
交通アクセスが良くなったことで、地区外の大形店に消費が流れているなか、各商店はがんばっている。経営者や従業員の方々にお話を聞くと、商魂たくましいというよりは、地域に根ざした「必要な存在」としての「強い思い」を感じる。



十川から東大寺へ

さて

て、JAで教えてもらったのだが、奈良の東大寺で使われている木炭の何割かは、ここ十川のJA支所から納めているのだそうだ。天下の名利から遠くこの地が、意外なところで結びついていることに少々驚いた。



「村の中心地」から、「町の端っこ」になつた十川であるが、人々の往來の様子やその表情、言葉から、「この地域を廃れさせてなるものか」という姿勢が垣間見えてくる。きつとこの氣質が、こいのぼりの川渡しなどの新しいアイデアを生み出してきたに違いないと思つた。

町の西の端。四万十川の両岸に流れ込む長沢川と鍋谷のムタニ川が、ちょうど四万十川と十字に交わる。「十字の川」が地名の由来という説もあるらしい。